

斗春飾ひ、之れを以ちて師に施したまふ。優婆塞二人を共に副へ、使に遣りて見送らしめたまふ。是の禪師、一日の道を送られて、法花經と并に鉢と干飯の粉と等を以ちて優婆塞に与へ、此より還らしむ。ただし麻繩二十尋と水瓶一口とを以ちて、別れ去りて匿る。二年を逕て、熊野村の人熊野河の上の山に至りて、樹を伐りて船を作る。聞けば音有りて法花經を誦む。日を累ね月を逕て、なほ読みて止まず。船を造る人經を読む音を聞き、心を發し貴びて、自が分の糧を擎げて推ね求むれども、形色を瞞ず。故に還りて居る。經を読む音、先の如く息まず。後に半年を歴て、船を引かむが爲の人、山に入りて聞けば、經を読む音なほ止まず。怪びて禪師に白す。禪師怪び往きて聞きたまへば実有り。尋ね求めて見たまへば、一の屍骨有り。麻繩を以ちて二の足を繋ぎ巖に懸けて、身を投げて死にたり。骨の側に瓶有り。すなはち知る、別れ去れる禪師なりといふことを。永興見て、悲び哭きて還りたまふ。然うして三年を歴、山人告げ知らせたまつる、經を読む音常の如くして止まずと。永興また往きたまひ、其の骨を収めむとして髑髏を見たまへば、三年に至りて其の舌腐ちず。宛然生有なり。諒に知る、大乘不思議の力と經を誦み功を積みたる験徳となりといふことを。賛に曰はく「貴きかな、禪師、血肉の身を受け、常に法華を

誦み、大乘の験を得、身を投げ骨を曝りて、髑髏の中に著きたる舌爛ちず。是れ聖にして凡にあらず」と。また吉野の金峯に一の禪師有り。峯を往きて行道く。禪師の往く前に音有りて、法花經と金剛般若經とを読む。聞きて留り立ち、草の中を排開きて見れば、一の髑髏有り。久しきを歴て日に曝りて、其の舌爛ちずして生に著きて有り。禪師取りて淨き処に収め、髑髏に禱りて言はく「因縁を以ちての故に、汝我れに値ふ」といふ。すなはち草茸を以ちて其の上を覆ひ、共に住みて經を読み、六時に行道く。禪師の法花を読むに随ひて、髑髏も共に読む。故に彼の舌を見れば、舌振ひ動く。是れまた奇異しき事なり。

生物の命を殺し怨を結びて狐と狗と作りて互相に怨を報ゆる縁 第二

禪師永興は、諾桑の左京の興福寺の沙門なり。俗姓は葦屋君氏、一は市住氏と云ふ。摂津国手嶋郡の人なり。紀伊国牟婁郡熊野村に住みて修行ふ。時に彼の村に病者有り。是れを禪師の住める寺に将来り、禪師を勧請へて病を看

に関心をよせた記述が存する。
三 妙法蓮華經の文字数は六万九千三百八十四とされた(下巻三十五縁、三十七縁。七巻または八巻に調卷することが多い。一巻はめづらしい。遊行する僧のためのものである。)
三 「白銅」は、銅とスズの合金。梵網經・第三十七輕戒にあげる頭陀僧の常に隨身すべき十八種物の中に「瓶」がみえる。
三 携帶用の坐臥具のひとつ。身体を接する部分が細製。頭陀僧の常に隨身すべき十八種物のひとつ。
三 糯米を搗き篩ひ、水で洗浄し、煮て日に晒し、さらに搗き篩つたもの。携帶食。水に浸して食べる。

一 頭陀僧の常に隨身すべき十八種物のひとつ。
二 麻(①)製の繩。「尋」は長さの単位。
三 船は山中で造られ、完成後に引き下された(播磨國風土記・讃容部。熊野は船の産地で、熊野舟(②)万葉集・十二・三三三)。真熊野之船(③)万葉集・六・四四四。真熊野之小船(④)万葉集・六・二三三)。熊野諸手船(⑤)書紀・神代下、などがみえる。

四 誦經して居る人に布施しようとして。
五 山から引き下す時には船の前部から引っぱったが、引き下す速度や方向を調節するために、船の後部にも綱をつけて逆方向へ引いた(万葉集・十四・四三三)。
六 鳥に身体を施すための捨身行か。

七 本説話には、時の経過が詳細に記述される。へ法華經を誦した者の舌が死後にも腐敗することがなかつた、という説話は唐代以後さかんにおこなわれた。隋代の旌異記あたりが古例か。法華經との関連は無いが、大智度論・九には、

阿弥陀經と般若經とを誦していた比丘の舌が火葬にも焼け残った、という説話がある。
八 そのような例にあること。

二 金剛般若經を誦した者の舌が死後にも腐敗することがなかつた、という説話は、孟献忠の金剛般若經集驗記にも段成式の金剛經鳩異にもみえず、太平広記に至つてもみえず、それはどきかんにおこなわれたものではない。ただし大智度論・九には誦般若波羅蜜故、舌不可焼とみえる。

三 「高燥処」ならざる所に葬られた死屍が「高燥処」に移葬されて安樂を得た、という説話の系譜につらなる。一上巻十二縁。「宜遷置淨所」設齋供養(統高僧伝・二十八ノ二)。
三 因縁があつたので、あなたは私に出会つた。前生での因縁を想定しての叙述であるが、前生での因縁の具体相は述べられない。

四 草庵をかまえた。
五 一上巻十三縁。
六 纓始発し、此之臂舌、一時鼓動、雖無二響声、而相似説誦(統高僧伝・二十八ノ一)。

第二縁 下巻一縁にひきつづき、永興にかかわる説話が提示される。

七 下巻一縁。
八 氏が葦屋・姓が君。本説話での狐との深い結びつきより推測すれば、後代の葦屋満満はこの氏の出自か。

九 大阪府箕面市、池田市、豊中市、吹田市あたり。
三 永興をその一人とする十禪師について、続紀は「或看病著」(宝龜三年三月六日条)。

しむ。呪する時には愈え、すなはち退むれば病発る。是くの如く怪生りて、多の日に輟まず。強ひて盟ひてなほ呪す。病者託ひて曰はく「我れは是れ狐なり。無用なり。伏はず。禪師強ふることなかれ」といふ。問ひていはく「何故ぞ」といふ。答へていはく「斯れ先に我れを殺しき。我れ彼の怨を報ゆるなり。是の人纔死なば犬に生れ我れを殺さむ」といふ。聞き怪びて教化ふれども、放さずして殺す。一年の後に、其の死にたる人の臥せりし室に、禪師の弟子病に臥す。爾の時に有る人、犬を繋ぎて禪師に来る。彼の犬吠え、抓きて枷の鎖を脱たむとし、鎖を断りて奔らむとす。禪師怪びて犬の主に告げて言はく「放ちて由を知らむ」といふ。纔放てば、病める弟子の室に走入り、狐を咋ひて引き出す。禪師犬を禁むれども鱗ひ殺すことを免れず。断に委る、斃にたる人還りて彼の怨を報ゆることを。嗚呼、惟れば、怨の報朽ちず。何を以ちての故に。毗瑠璃王、過去の怨を報いて釈衆九千九百九十万人を殺す。怨を以ちて怨を報ゆ。怨なほし滅びず、車の輪の転るが如し。もし有る人能く忍辱を学ぶる時に、怨むる人を見れば、我が恩の師とせよ。彼の怨を報いず、之れを以ちて忍とせよ。是の故に、怨はすなはち忍の師なり。所以に書伝に云はく「もし罵を忍びずは、心危くして其の母をすら打殺さむ」といふは、其れ斯れ

を謂ふなり。

沙門十一面觀世音の像に憑願ひて現報を得る縁 第三

三

沙門弁宗は、大安寺の僧なり。天年弁有。白堂を宗とし、多く檀越を知り、高く衆の氣を得たり。帝姫阿倍天皇の代に、弁宗其の寺の大修多羅供の錢三十貫を受用て、償ひ納むること得ず。維那の僧等錢を徴りて逼むれども、償を償ふに便無し。故に泊瀬の上山寺に登り、十一面觀音菩薩に参向て、觀音菩薩の手に繩を繫けて引きて白して言さく「我れ大安寺の修多羅宗分の錢を用て、償ふに便無し。願はくは我れに錢を施へ」とまうし、名を称へて願ひ求む。是に維那等、来り徴りてなほ逼む。答へて言はく「暫待て。我れ菩薩に錢を白して償はむ。敢へて久しく延べず」といふ。時に船親王善き縁有りて其の山寺に参至り、法事を備けて行ひたまふ。弁宗法師像に繫けたる繩を引き、なほ白して曰さく「錢を速に我れに賜へ。徴る錢速に償はむ」とまうす。親王聞きたまひて、弟子に問ひて言はく「何の因縁を以ちて今斯の禪師是くの

「原文」即退。呪することをやめると同時に、の意。二いわる狐憑きである。
三「纔」は、一すると同時に、の意。
四「縛」は、一すると同時に、の意。
五この狐は永興の寺の室に住みついているような印象を読者に与えている。
六もどつて来て。

七釈種(釈迦族。釈迦牟尼仏もこの一族の出身)の女を妻としようとした波斯匿王(はしやく、釈種に謀られて婢を妻としたが、その婢より生まれた毗瑠璃王流離は、釈種に罵詈雑言され、王となつてのちに釈種を攻め滅ぼした。増一阿含經・二十六はじめ諸書にみえる。
八過去世の怨。前生での怨が今生ではらされた、とされる。増一阿含經・二十六によれば、羅闍城の人々は拘瓊魚を食べたが、その拘瓊魚が今生の毗瑠璃王、羅闍城の人々が今生の釈種。
九「以怨報怨、怨終不滅」菩薩戒本疏・下本、梵網經古述記・下末などに長寿王經の文としてみえる。二上卷六縁。

三未詳。本説話に引用された書伝の文には其母の語がみえるが、上卷二十三縁にも書伝に關して「徒学書伝、不養其母」とあった。孝にかかわる記述を含んだ同一の書物であろう。三他人に罵詈雑言することに耐えられないならば、心に不安を生じ殺生の業をつくるであろう。自分の母さえもついに打ち殺すであろう。母からの叱責にさえも耐えられないであろう。

第三縁 善業についての現報説話。下巻では本説話のみ。今昔物語集・十六ノ二十七に書承。

四未詳。本説話以外に所伝をみない。長谷寺

藏本・長谷寺驗記・下所収の類話に主人公を「弁宗法師」とする。これによつて「べんそ」とよんでおく。五弁舌にたけている。
六未詳。弘仁九年(八二五)五月二十九日の官符(類聚三格・三)に「拳衆白堂威令・機海」とみえる改証。「堂前に白す、つまり、祈禱する人々の願を仏の堂に申して取次ぐ、の意か」とする遠藤嘉基、春日和男の説に諸注はしたが、が、「白」が「も」の意か否か、「堂」が「堂舎」の意か否か、不明である。言語が明瞭である、声がとおる、といった「亮堂」の語に類似した意ではないだろうか。

七「中卷二十四縁、二十八縁。
八三綱のひとつ。寺内の僧を規制する職。
九長谷寺。

三本造。高さ二丈六尺。神龜四年(七五七)完成(三寶絵・僧二十所引觀音の縁起并に雜記)。天平五年(七三三)開眼(長谷寺縁起文)。のちに焼失し、現在の十一面觀音像は後代のもの。本説話で、大安寺の仏菩薩(たとえは丈六仏。上卷三十二縁、中卷二十八縁に祈願せずになだに泊瀬におもひつゝ縁に注目される。大安寺伽藍縁起并流記資財帳(七四七・七五七)には十一面觀音像を載せない。この種の祈願はもっぱら十一面觀音像にしておこなわれ、しかも大安寺に當時十一面觀音像が無かつたのであろうか。

三施無畏手である数珠を持つ右手に、繩を繫けたのであろう。「及作三施無畏手者、修行求願、必得所願、故表三施無畏手者、謂三福慧二宝、能施一切、破貧窮困、故為施無畏手、也(十一面神呪心經義疏)。「一切財物衣服飲食、自然充足、恒無乏少」(十一面觀世音神呪經。中村史の指摘がある)。